

## 水俣で感じた一人ひとりの想い ～「あるものを生かす・つながる」まちづくり～

日程：平成26年6月27日（金）～29日（日）

文責：福岡県大刀洗町 棚町佳菜

水俣全体は地元学の実践の場である。水俣は都会を目指していない。市民と行政が自分の足元にあるものを徹底的に生かし、充実させ、それを楽しんでいる。

水俣病という最大の公害を生んだこの土地は再生した。それは、まずそこに住み苦しんでいる人の声を聞いたことから始まっていた。杉本肇さんの話では水俣病により、これまであった地域のつながりが崩壊し、母栄子さんが受けた差別や幼少ながら家族を支えなくてはという想いで過ごしていたことが語られた。一旦水俣は離れて生活はするものの、水俣へ戻って生活をしている。できることは大人が子どもに伝えていくこと、人が笑顔になることであることから「やうちブラザーズ」の活動を行っている。

水俣資料館はただ事実を伝えるだけのものではない。入口にあるのは希望。この希望も外からではなく、徹底的に資料館が行った地元学の成果物であった。公害の事実だけでなく、そこで生きてきた人の声が詰まっている。「人様は変えられないから自分が変わる」と杉本栄子さんの言葉が印象的だった。

天の製茶園には人が集まる場所がある。今回は残念ながらものづくりの現場には行けなかったが、火を囲んで食事ができる。そしてそれをしているのは親子のつながり。ここで生きるために環境に優しい、他にない独自の無農薬の紅茶を作る。大変なことは、草取り。日常の生活がそこにある。比べて何がなく、自分しかできないことを追及している。そこには、家族の中にあるそれぞれの想いによって成り立っていた。

頭石地区の村丸ごと博物館は、地元学の極みであった。あるものを紹介する、というものである。同じものなどどの地域にも存在しない。それは田んぼひとつ、石一つにおいてもそうである。この地区の住民である学芸員山口さんが案内してくれた。車で通れば1秒ですぎる景色が博物館では1分はそのものを見ているようなものであった。なぜそこにこれがあるのか、そのような見方をすると当たり前存在しているものなど一つもないことに気付いた。

吉井元水俣市長の話では水俣病でなくなった地域の繋がりが再生できたのは、もやい直しであることが語られた。この、もやい直しは相手を尊重し対話をすることで垣根を越えた価値観が生まれる取り組みであった。また、水俣病という特殊性に注目し、だから環境都市にすること、地元学のまちづくりにしようと取り組んできたことが語られた。

ゴミ減量女性連絡協議会では、地元の女性が主力になり活動をしている。会長、副会長を置かない、出席してもしなくてもそれもいいというゆるい仕組みで意見を言い合える。喧嘩はしない約束。目指すものは地元のごみの減量。市民として地元の市民が経営する店にごみ減量のお願いをするなど、市民の中で活動が繰り広げられた。行政が主導し強制力ではなく、地元の女性の力を最大に生かしている。女性でなければできなかった。

水俣中央商店街の取り組みでは、行政ではできない、そこにある商売人同士でないとできないこと、わからないことがあった。その商売人同士を結び付けてできたスイーツマップづくり。これはスイーツのまちづくりとなり、水俣市のまちづくりの一端を担っている。新しく作るのではなく、昔からそれぞれあったところを結んでいった結果である。

水俣市の取り組みは、徹底した地元学の上に成り立っていると感じた。地元のこれを生かそう、今あ

るもの同士を繋げていこうという様子がよく分かった。今ある自然、物、人が結びつくところな生き生きとした町になるのかと思った。

自分の地域はどんな地域なのかを知らずに、他の地域の取り組みがいいと思えばそれを取り入れてみたり同じことをしてみたりしている。しかし、住民が良くなっている様子はあまりないような気がしている。

同じものはない。そこに気付けるかどうかなのだろうと思う。「そんな人がいない」「なにもない」のではなく、見えていないだけ。目指すものは水俣ではなく、水俣のように自分の町にあるものを生かした取り組みであると思った。